

I. 導入

おはようございます。この地図を見れば、ローマへ向かうパウロの旅路を追う私たちの学びがどのあたりかわかります。エルサレムで、パウロは身に覚えのない容疑で捕えられました。その後、パウロを殺そうと熱心に企てる人々から逃れてカイサリアへと送られました。パウロは無罪であったにもかかわらず、それから二年も投獄されたままでした。ついに、パウロは皇帝に上訴し、ローマへ護送されることになりました。ところが、冬が近づいているというのに軽率にもクレタから船を出航させたせいで、パウロが乗っていた船は冬の嵐に巻き込まれ、二週間風に吹かれて漂流しました。そして、マルタ島で座礁したのです。



主がパウロに約束されたとおり、全員が無事に陸に上がりました。そこは現在、セントポール湾と呼ばれる場所です。今日の聖書箇所では、一行の到着に島民がどう反応したかがわかります。では、使徒28:1-16を読みましょう。



II. 聖書朗読(使徒言行録28:1-16, 新共同訳)

28:1 わたしたちが助かったとき、この島がマルタと呼ばれていることが分かった。 28:2 島の住民は大変親切にしてくれた。降る雨と寒さをしのぐためにたき火をたいて、わたしたち一同をもてなしてくれたのである。 28:3 パウロが一束の枯れ枝を集めて火にくべると、一匹の蝮が熱気のために出て来て、その手に絡みついた。 28:4 住民は彼の手にぶら下がっているこの生き物を見て、互いに言った。「この人はきっと人殺しにちがいない。海では助かったが、『正義の女神』はこの人を生かしておかないのだ。」 28:5 ところが、パウロはその生き物を火の中に振り落とし、何の害も受けなかった。 28:6 体がはれ上がるか、あるいは急に倒れて死ぬだろうと、彼らはパウロの様子をうかがっていた。しかし、いつまでたっても何も起こらないのを見て、考えを変え、「この人は神様だ」と言った。

28:7 さて、この場所の近くに、島の長官でプブリウスという人の所有地があった。彼はわたしたちを歓迎して、三日間、手厚くもてなしてくれた。 28:8 ときに、プブリウスの父親が熱病と下痢で床についていたので、パウロはその家に行って祈り、手を置いていやした。 28:9 このことがあったので、島のほかの病人たちもやって来て、いやしてもらった。 28:10 それで、彼らはわたしたちに深く敬意を表し、船出のときには、わたしたちに必要な物を持って来てくれた。

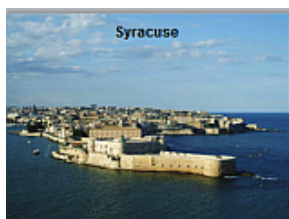
28:11 三か月後、わたしたちは、この島で冬を越していたアレクサンドリアの船に乗って

出航した。ディオスクロイを船印とする船であった。 28:12 わたしたちは、シラクサに寄港して三日間そこに滞在し、 28:13 ここから海岸沿いに進み、レギオンに着いた。一日たつと、南風が吹いて来たので、二日でプテオリに入港した。 28:14 わたしたちはそこで兄弟たちを見つけ、請われるままに七日間滞在した。こうして、わたしたちはローマに着いた。 28:15 ローマからは、兄弟たちがわたしたちのことを聞き伝えて、アピイフォルムとトレス・タベルネまで迎えに来てくれた。パウロは彼らを見て、神に感謝し、勇気づけられた。 28:16 わたしたちがローマに入ったとき、パウロは番兵を一人つけられたが、自分だけで住むことを許された。

III. 教え

聖書の訳によっては、16節に次のような一節が含まれる場合があります。「百人隊長は看守長に囚人たちを送り届けた。」これはおそらく実際に起こったことだと思いますが、ほとんどの聖書学者は、その一節が原本にはなかったと考えています。パウロは牢獄ではなく借家に住むことが許可されました。これは、ローマ帝国の役人たちがパウロの無実をわかっていたからでしょう。審議の順番が来るにはずいぶん待たなければならないようです。とは言え、パウロが皇帝に上訴した手前、釈放することはできませんでした。

マルタ島で冬を越し、一行は数週間でローマに到着しました。シシリア島の東岸にあるシラクサに三日間滞在しました。そして、



イタリアの地図を見ると長靴の先に位置するレギオンで一夜を明かしました。プテオリで船を降り、そこで兄弟たちと七日間過ごしました。

ローマまでまだ200km以上もありましたが、一同はアッピア街道沿いに陸路を進むことにしました。一行がプテオリで滞在中に、パウロがローマへ来るという知らせを誰かが送ったのでしょうか。ローマの兄弟たちがアピイフォルムとトレス・タベルネまで迎えに来てくれました。このようにして、パウロに会いたがっていたクリスチャンの出迎えで励まされ、マルタ島からローマへの道のりは順調に進みました。



以前、クラウデオ帝がすべてのユダヤ人をローマから退去させましたが（使徒18:2）、この頃までにはその勅令は無効になっていました。追放されたユダヤ人の多くはローマに戻っていました。パウロを出迎えた人々は、退去中に他の場所でパウロに出会った兄弟姉妹だったかもしれません。

パウロは無事ローマに到着しました。さて、船が座礁した後、マルタ島でどのようなことが起こったか、戻って見てみましょう。使徒28:1-2 「 28:1 わたしたちが助かったとき、この島がマルタと呼ばれていることが分かった。 28:2 島の住民は大変親切にしてくれた。降る雨と寒さを

しのぐためにたき火をたいて、わたしたち一同をもてなしてくれたのである。」マルタ島の住民は、難破して島にたどり着いた旅人たちに親切でした。とは言え、276名もの人々を宿泊させる施設はなかったのでしょうか。そこで、海辺にたき火をたいて、少なくとも寒さをしのげるようにしてくれました。おそらくこれは11月ごろのできごとですから、島に上陸した一行は空腹な上に、びしょぬれで震えていたでしょう。

使徒28:3に、パウロの奉仕の精神がうかがえます。パウロは火にくべるたきぎを集める手伝いをしていました。「パウロが一束の枯れ枝を集めて火にくべると、一匹の蝮が熱気のために出て来て、その手に絡みついた。」この蛇がサタンを象徴すると断言はできませんが、サタンを象徴する蛇がパウロに襲いかかったという解釈もなかなかおもしろいと思います。ここで注目すべきなのは、神はパウロが重症にならないように守ってくださった一方で、蛇にかまれるという痛みと恐怖からは守られなかったという点です。



使徒28:4「住民は彼の手にはぶら下がっているこの生き物を見て、互いに言った。『この人はきっと人殺しにちがいない。海では助かったが、[正義の女神]はこの人を生かしておかないのだ。』」島民は親切でしたが、同時に迷信深い人々でした。正義の女神とは、ローマ神話の女神を指します。パウロが悪人である証拠もなしに、蛇にかまれたことを神からの天罰だと島の住民は決めつけました。

使徒28:5「ところが、パウロはその生き物を火の中に振り落とし、何の害も受けなかった。」もし蛇がサタンの象徴だとすれば、サタンは負けて火に投げ込まれたことになります。黙示録20:10で、終わりの日にサタンが火に投げ込まれると言ってはいますが、それはパウロの手による業ではありません。

使徒28:6「体がはれ上がるか、あるいは急に倒れて死ぬだろうと、彼らはパウロの様子をうかがっていた。しかし、いつまでたっても何も起こらないのを見て、考えを変え、『この人は神様だ』と言った。」島民の考えは180度変わります。最初、パウロが人殺しに違いないと決めつけ、次にはパウロが神だと言い出しました。どちらの言い分にも根拠はありません。迷信に振り回されると、こんなふうになってしまうのです。

信仰自体に懐疑的な人々は、すべての宗教は迷信であると言います。しかし、聖書に則った信仰は、迷信とはまったく異なります。迷信にはなんの裏付けもありません。一方、聖書に則った信仰と健全なキリスト教の教理には、それを裏付ける根拠が十分にあります。

A. A. ホッジは、3年間インドで宣教師として活動した後、アメリカに帰国して牧師として奉仕しました。後に、1878～1886年までプリンストン神学校の学長を務めました。彼は、信仰について触れ、「信仰には十分な根拠が不可欠である。さもなければそれは迷信に過ぎない」と記しました。聖書の神は、根拠もなく信じなさいとはおっしゃいません。迷信を信じるように私たちがそそのかすのは悪魔の業です。

17世紀の詩人、ジョージ・ハーバートは、賛美歌の作詞家であり、英国国教会の司教でもありました。



ハーバートは次のように記しました。「悪魔はこの世を二分する。そのふたつとは無神論と迷信である。」悪魔は根拠のある信仰を嫌うので、人が無神論と迷信のどちらかにひっかかるのを喜びます。無神論にも迷信にも、十分な裏づけがありません。無神論は筋が通っていて科学的だと思いがちですが、実際のところ、無神論にはこれといった根拠は何もないのです。

無神論の決め手となるような根拠はありません。無神論者がするのはただ、キリスト教をはじめあらゆる宗教に対して異論を唱えることだけです。無神論者は、この世に苦しみがあることを指摘し、神は愛であるというキリスト教の教えに反論します。正しくてあわれみ深い神など矛盾するので不可能であると言います。神はご自分が動かすことのできないほど大きな岩を作ることができるかと、とんちのような問いかけをする無神論者もいます。このような言い分はどれも、神は存在しないという無神論者の信条を裏付けるものではありません。これらが示すのはただ、神のご性質がどのように調和するのかを理解するのは難しいという事実です。

ほとんどのクリスチャンは、人間の神についての理解は限定的で完全ではないという見解に同意するでしょう。つまり、無神論者の掲げる異論は、神の存在や聖書の信憑性を裏付ける根拠から目を背ける人にも有効であると言えます。無神論とは、神はいないという否定論を根拠もなく信じることです。無神論について聖書はこう語ります。(詩篇14:1a)「神を知らぬ者は心に言う『神などない』と。」

一方、迷信はむやみやたらとあらゆることを信じます。パウロが人殺しや神であるという証拠は何もありませんでしたが、迷信深い人々はすっかりそう思い込んでしまいました。聖書には、迷信に対する警告が随所に見られます。中でも明確なものがテモテ第一4:7にあります。「俗悪な、年寄り女がするような空想話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分を鍛練しなさい。」(新改訳)

キリスト教の信仰でも、見えるところと理解を超越した領域に踏み出しなさいと神は私たちにおっしゃいます。コリント第二5:7はこう言います。「目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです。」ヘブル11:1にはこうあります。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」これらの箇所は、目には見えないことに関する神の約束を信頼することの重要性を教えています。それには、私たちの救いや復活などが含まれます。



こういったみことばは、信仰について説得力のあるすばらしい箇所です。一方で、未信者には迷信のように思えるかもしれません。聖書全体としては、真理を裏付ける根拠をしっかりと考えて検証するように神が促されると教えます。公平な観点を保つため、ここで論理や根拠について聖書が語る箇所も見ておきましょう。

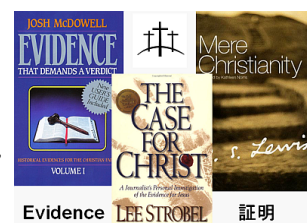
イザヤ書1:18にはこうあります。「論じ合おうではないか、と主は言われる。たとえ、お前たちの罪が緋のようでも／雪のように白くすることができる。たとえ、紅のようであっても／

羊の毛のようになることができる。」私たちが何の根拠もなくただ盲信することを神が望んでおられるなら、論じ合おうとはおっしゃらないでしょう。

イエスが死からよみがえられた後のできごとを、使徒1:3はこう語ります。「イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。」イエスは弟子たちに、何でもよいからとにかく復活を信じなさいとはおっしゃいませんでした。むしろ、多くの証拠を示し、信じざるを得ない明確な根拠を与えてくださったのです。

ペトロ第一3:15はこう語ります。「心の中でキリストを主とあがめなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」私たちの持つ希望についていつでも弁明できるように備えるには、信仰の根拠をいつでも提示できなければなりません。イエスと出会い、ともに歩んでいるという私たち自身の経験を語る証は、信じる根拠として大切な部分をなします。自然界に現された神も信じる根拠となります。聖書の預言の成就も信憑性の裏づけとなります。奇跡を目撃したという証言や、復活後のイエスに出会ったという人々の証言が聖書に数多く記されていますが、これらも重要な裏づけです。

今日、これらの根拠について詳しく語ることはしませんが、インターネットや書籍で、信仰の根拠について説明する良い資料がたくさんあります。以前も皆さんにお話しましたが、キリストを信じる信仰を検証するのに役立つ本を3つ紹介します。ジョシュ・マクドウェル著「Evidence that Demands a Verdict」（邦訳なし）、リー・ストロベル著「ナザレのイエスは神の子か」、C.S.ルイス著「キリスト教の精髓」です。英語のものは、教会で貸出または販売しています。「キリスト教の精髓」については、邦訳版も教会にあります。



使徒28:7に戻しましょう。「さて、この場所の近くに、島の長官でプブリウスという人の所有地があった。彼はわたしたちを歓迎して、三日間、手厚くもてなしてくれた。」プブリウスの父親が病気になりました。そこでパウロはプブリウスの家に行き、彼に手を置くと癒されました。それを知って、島中の人々が病気を治してもらおうとやってきました。教会の伝承によると、パウロがこのような癒しとイエスについての証と教えをもたらした結果、プブリウスはクリスチャンになったといえます。プブリウスはマルタ島で初めての司教になりました。そして多くのマルタ島民が信仰を持つようになり、後にマルタは西洋初のキリスト教国家となりました。



現地にある聖パウロ礼拝堂は、サンパウルミルキと呼ばれます。これは直訳すると聖パウロ歓迎という意味です。この場所は、プブリウスが最初に聖パウロと出会い、迎えた場所だと言われています。これは史実として証明されていませんが、礼拝堂がプブリウスの住居や職場にふさわしいと思われる敷地内に建っていることから、こ



の言い伝えはある程度信頼できると言えるでしょう。

IV. 結び

パウロが福音を告げ知らせたように、現代では教会が減び行く世にイエスの福音を大胆に告げ知らせます。私たちが知らせるのは、イエスを信じて呼び求める者すべてに与えられる罪の赦しです。イエスの十字架上の死が、この世全体の罪の代価として神に受け入れられたことを知らせます。神の恵みが十字架であふれんばかりに注がれ、信仰を持って受け取るなら誰もが無償で救いをいただけるようにしてくださいました。私たちはイエスを信じます。イエスが十字架で成し遂げてくださった御業を信じます。そして罪の赦しと永遠の命を受け取ります。罪の赦しと永遠の命は、主イエスの復活によって確かにされたものです。

神は救いをすべての人に提供されます。何も考えず信じなさいとはおっしゃいませんが、提示された信仰の根拠を受け入れ、イエスを信じるようにとおっしゃいます。私たちが救うためにイエスが成してくださった十字架の御業を信じなさいと招いておられます。イザヤ書1:18, 「論じ合おうではないか、と主は言われる。たとえ、お前たちの罪が緋のようでも／雪のように白くすることができる。たとえ、紅のようであっても／羊の毛のようになることができる。」



祈りましょう。

V. 祈り